

国連総会が再度の死刑執行停止決議

執行を乱発する日本の法相

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

昨年12月18日、国連総会は死刑執行の停止を求める決議を、再度、採択しました。賛成106カ国（2007年は104カ国）、反対46（同54カ国）、棄権34カ国（同29カ国）でした。この1年間で賛成国が2カ国増えたほか、反対だった国が棄権に回るなどしており、着実に死刑廃止の方向に歩んでいる世界の姿がうかがえます。

☆☆☆

日本は残念ながら、この決議に反対票を投じるばかりでなく、今や世界でも数少ない、実質的に死刑を強化している例外的な国となっています。昨年1年間の日本の死刑執行は15人にのぼりましたが10人以上の執行は1976年以来のことになります。国会審議に影響を与えないようにと、国会閉会中に、せいぜい年1～2回なされるだけだった執行が、ほとんど隔月に近い間隔でなされだし、法務大臣は何ら悪びれることがありません。

☆☆☆

2007年4月27日、長勢甚遠法相（当時）は国会会期中の執行に踏み切りました。同年12月7日、鳩山邦夫法相（当時）は3名の執行に際して、被執行者の氏名や事件内容を初めて公表しました。しかし、そこでは、被執行者がそれぞれの裁判や心身の状態にどのような問題を抱えていたのか、何ら触れていません。

☆☆☆

昨年10月28日に福岡拘置所で死刑を執行されたKさんは、状況証拠のみで死刑判決を受けた人でした。「小学校1年生の女子2名殺人事件の犯人」とだけ聞けば、とりわけ同年齢のお子さんを持つような人たちは「許せない、死刑も当然」とまず反応されるのではないのでしょうか。

この事件では、現場で目撃されたタイプの車の所有者が片っ端から調べられ、事件から2年以上経ってから、被害者の着衣に着いていた繊維とその車のシートとが同じだという鑑定結果によってKさんが逮捕されました。しかしKさんは一貫して無実を主張し、死刑判決が確定した後も、再審したい、鑑定をやり直してほしいと求めているのです。

そんな人に対して、就任わずか1ヶ月の森英介法務大臣は死刑執行を命じました。執行後、Kさんの冤罪の可能性を指摘された森法相は、法務省はそんなことは言わなかった、と慥然としていたとのこと。

☆☆☆

以前であれば、再審の道は険しくとも、少なくとも、一貫して無実を主張しているような人への死刑執行は慎重にされてきました。鳩山邦夫法相（当時）が導入したベルトコンベア式の死刑執行は、冤罪による死刑執行の疑惑や恐怖を増殖させるものであり、それこそ国連決議が否定しようとするものです。